



2024 → 2025

東京アートポイント計画

—
ACKT
(アクト/アートセンタークニタチ)

—
多摩の未来の地勢図
Cleaving Art Meeting

—
カロクリサイクル

—
KINOミーティング

—
めとてラボ

—
Memorial Rebirth 千住 2024

—
Tokyo Art Research Lab

—
Artpoint Meeting

—
東京都・区市町村連携事業

Artpoint Reports



Artpoint Reports

2024 → 2025

はじめに

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを行う文化事業です。2009年にスタートして、今年で16年目。わたしたちが目指しているのは、日常や地域に芸術文化が根つき、東京というまちが創造的な場所になっていくこと。そのために、持続的な活動を行うための拠点づくりや担い手の育成、活動基盤の整備なども行っています。『Artpoint Reports 2024→2025』は、一年を振り返りながら、ちょっと先の未来について考えるレポートです。

もくじ

02 About

- 02 東京アートポイント計画とは
- 04 メンバー紹介

05 News

- 2024の取り組み

09 Voices

- 2024→2025について語る
- 09 拠点から「いま」の東京を考える
- 12 「そのままいられる」環境をつくる
- 15 生活より手前のことに目を向ける
- 18 誰かと一緒にやることの可能性
- 21 変化の時代、アートを生活の一部に

24 Annual costs

- 事業予算

25 Projects

- 事業一覧

31 Information

- お知らせ

東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」*1をつくる事業です。教育機関や企業等の多様な主体と連携しながら、NPO*2を軸に、区市町村、東京都、アーツカウンシル東京*3などが共催で事業を行っています。

当たり前を問い直す、課題を見つける、異なる分野をつなぐ——そうしたアートの特性をいかし、実験的なアートプロジェクトを通して、個人が豊かに生きていくための関係や仕組みづくり、コミュニティ育成に取り組んでいます。特徴は、専門スタッフであるプログラムオフィサーが、情報やスキルを提供しながら現場に伴走すること。複数年かけて、NPOが持続可能な活動を行うためのサポートを行っています。

また、アートプロジェクトを支える環境を整備するために、絶えず研究・開発を行うことで、社会の変化に応答し続けています。

*1 アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が集まる創造的な拠点のこと。アーティスト、運営スタッフ、ボランティア、参加者などさまざまな人によって形成されると考えています。

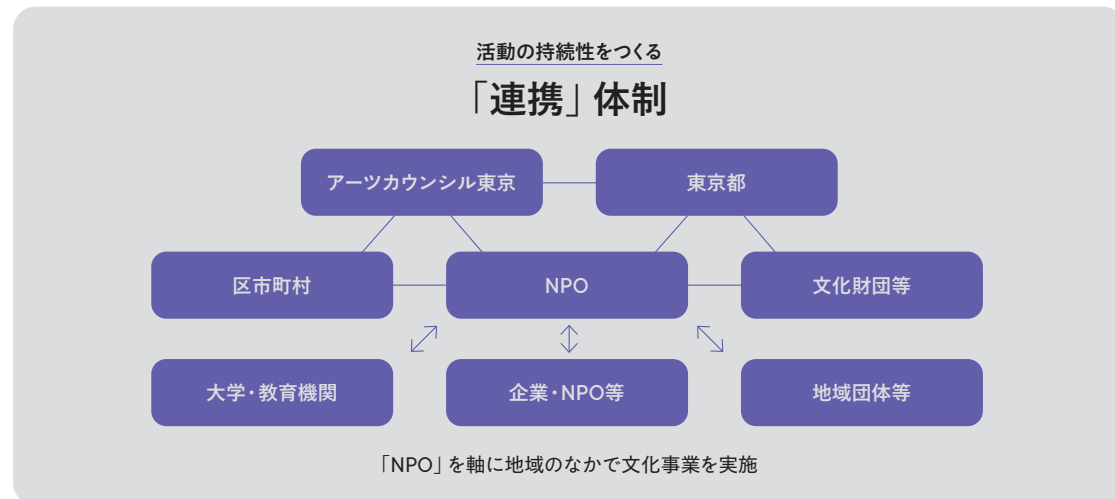
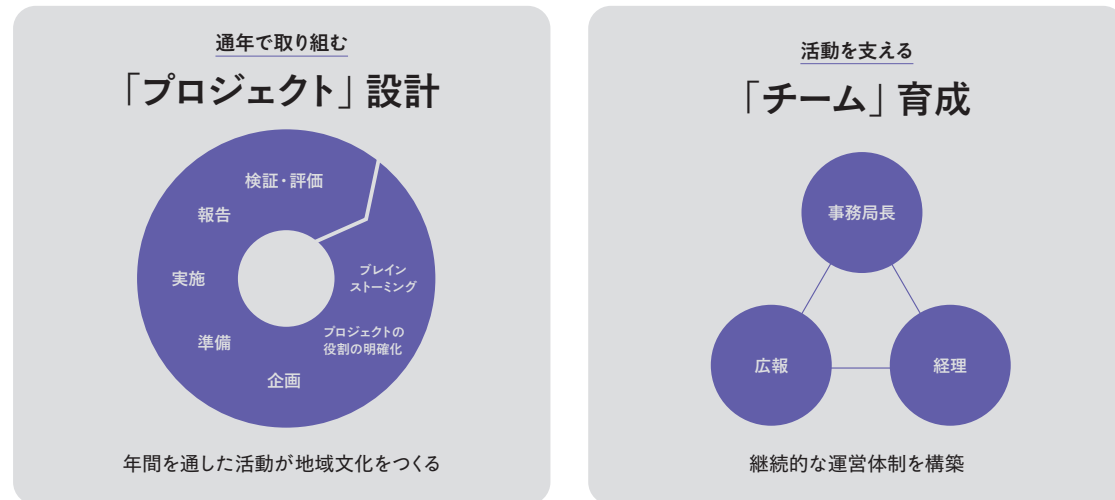
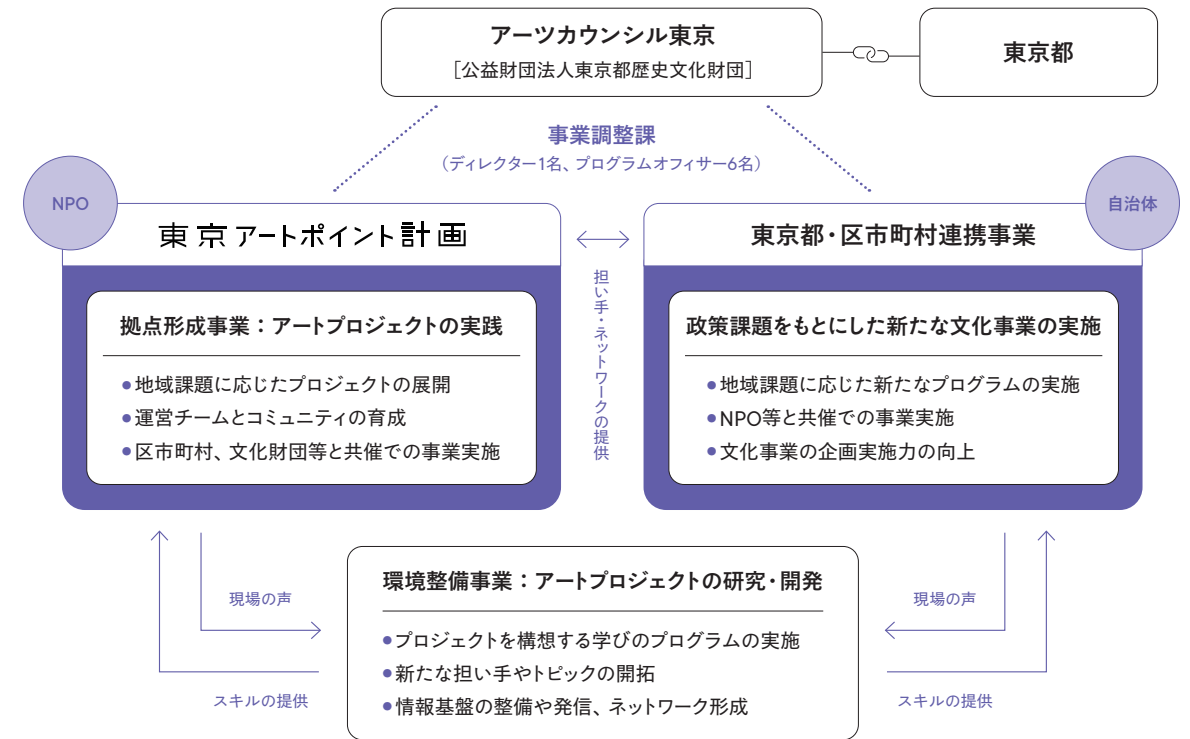
*2 特定非営利活動法人（NPO）のほか、一般社団法人など非営利型の組織も含まれます。共催相手には、大学等も入る場合があります。

*3 アーツカウンシル東京は、都内で文化施設の運営や文化事業の実施を行う公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織。都の文化政策に基づき、新たな芸術文化創造の基盤整備をはじめ、東京の独自性・多様性を追求したプログラムなどに取り組んでいます。

「わたしたちの仕事」

東京アートポイント計画は、アーツカウンシル東京の事業調整課が担当しています。都の文化政策の目的や課題を読み解き、事業の方向性を模索すること、NPOを軸にさまざまな文化事業の担い手との対話を重ねながら社会に向き合い、次の一手をしかけていくことを目指しています。

2024年度からは東京都・区市町村連携事業も担当し、「政策」を担う東京都や区市町村と、「事業」の企画・運営を担うNPO等との間に立つアートマネジメントの専門職として、現場を動かしています。文化政策と事業をつなぐ役割を担うことで、文化事業としての社会的意義を高めています。



▶ 共催団体数 | 62団体 (2009年～2024年度)

*1 東京都・区市町村連携事業 *2 環境整備事業

NPO：46

区市町村：11 (豊島区、荒川区、練馬区、足立区、小金井市、三宅村、国立市、西東京市*1、中野区*1、府中市*1、港区*2)

財団：4 (公益財団法人せたがや文化財団 生活工房、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団*2、公益財団法人仙台市市民文化事業団*2)

大学：1 (東京藝術大学音楽部・大学院国際芸術創造研究科)

▶ 共催事業数 | 49事業 (2009～2024年度) *年間約100件のプログラムを実施、東京都・区市町村連携事業を含む

▶ Tokyo Art Research Lab (TARL) 受講生数 | 1,950名 (2025年2月現在累計)

▶ 共催団体評価・選定会議委員

太下義之 (2015～)
文化政策研究者

小山田徹 (2015～)
アーティスト/
京都市立芸術大学 教授

西村佳哲 (2015～)
プランニング・ディレクター/
リビングワールド 代表

荻原康子 (2015～)
「隅田川 森羅万象 墨に夢」
統括ディレクター

竹久 侑 (2015～)
水戸芸術館
現代美術センター 芸術監督

2024の取り組み

ネルで番組を配信しました。

プログラムオフィサーの佐藤李青は「何かあったとき、すぐに動けるNPOがまちのなかにいる。東京アートポイント計画で鍛えたNPOの“筋力”がいかされた」と振り返ります。府中市の担当者にとっては、NPOとの本格的な協働は初めてのこと。「自分たちだけではできない場をつくれた」という声をもらいました。今後の連携に向けた政策課題のヒアリングや地域のリサーチを重ねることで、事業の立ち上げ方をより丁寧に進めていきたいと思っています。▶ p.18, 21



(撮影 | 高橋真美)

東京都・区市町村連携事業が はじまりました。

執筆 | 佐藤恵美

2040年代の東京のあるべき姿を描き、これからの文化行政の方向性や重点施策を示した「東京文化戦略2030」。このビジョンのもと、地域のなかで人々がもっと身近に芸術文化に触れられる環境づくりを進めています。その一環として、区市町村の政策課題を起点とした新たな活動を後押しする「東京都・区市町村連携事業」が2023年度にスタート。2024年度からは、これまでも区市町村と連携してきた東京アートポイント計画のノウハウを活用し、ともに事業を実施しています。

今年度は西東京市、中野区、府中市と協働しました。なかでも府中市では、2023年度に東京アートポイント計画を巢立った『Artist Collective Fuchu [ACF]』が奔走しています。「デフリンピックを見据えた共生社会への取り組みを行い」という市の意向をもとに、ACFによるラジオ番組『おとのふね』での企画を提案。「共生社会を聞いて、みる」というタイトルで、府中市長やブラインドサッカー日本代表監督の中川英治さんなどをゲストに招き、市のYouTubeチャン

ウェブサイトを リニューアルしました！

アートプロジェクトのかたちを考えるきっかけになることを目指して、TARLのシリーズ「新たな航路を切り開く」をナビゲートしてきた芹沢高志さん（P3 art and environment 統括ディレクター）らと制作。現在、ベータ版としての公開のため、これからこの「年表」を育てていきたいと思っています。

また、これまで行ってきた共催団体やディレクターの森司のインタビューなどを英訳し、東京アートポイント計画を紹介する英語記事も充実してきました。ぜひ、ご覧ください。▶ p.12



アートプロジェクトの担い手のためのプラットフォーム『Tokyo Art Research Lab (TARL)』のウェブサイトをリニューアルしました！ウェブディレクターの萩原俊矢さんを中心としたチームとともに、2年前の大幅リニューアルから、改良を重ねてきました。

今回も、障害者専門クラウドソーシングサービス『サニーバンク』の協力を得て、視覚・聴覚・精神・発達・肢体不自由などの障害当事者の方にデザインや操作に関するフィードバックをもらいながら、ウェブアクセシビリティの向上を目指しました。大きく変わったのはトップ画面です。背景にライトグレーを敷き、デザインとして柄のように入れていた「new」の文字を白抜きにすることで、明度差による色の刺激をやわらげ、より文字と写真に目がいくようにしました。画面の自動再生を操作するインジケータも変更し、より感覚的に使えるように。

そして、新しく「年表」機能が登場しました。2011年以降に生まれたアートプロジェクトとそれらを取り巻く社会状況を一望し、これからの時代

執筆 | 川村庸子



(撮影 | 池田 宏)

メンバー紹介

ディレクター

1 森司 (2009～) MORI Tsukasa

1960年愛知県生まれ。水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、現職。2020年度より東京都歴史文化財団共通事業「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」や、TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム『黙るな 動け 呼吸しろ』も担当している。「何もしない日を楽しんでいます」

プログラムオフィサー

2 佐藤李青 (2011～) SATO Risei

1982年宮城県生まれ。小金井アートフル・アクション!実行委員会事務局局長を経て、現職。『ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)』『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』『カロクリサイクル』、Artpoint Meetingなどのほか、東京アートポイント計画と東京都・区市町村連携事業の全体統括を担当。「能登へのかわりを模索中です」

3 櫻井駿介 (2021～) SAKURAI Shunsuke

1990年神奈川県生まれ、東京育ち。東京藝術大学大学院博士課程修了。インストーラー、アートマネージャーとして活動したのち、現職。『ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)』『めとてラボ』『Memorial Rebirth 千住 2024』、Artpoint Meeting、Tokyo Art Research Lab等を担当。「多肉植物が元気なら、僕も元気です」

4 小山冴子 (2022～) OYAMA Saeko

1982年福岡県生まれ。フリーランスのアートマネージャー、企画者として、さまざまな地域での芸術祭やアートプロジェクトに携わったのち、現職。現在『KINOミーティング』『めとてラボ』、Tokyo Art Research Lab等を担当。「記憶の葉として短い日記メモをスケジュール帳に書いています」

5 川満ニキアン (2022～) KAWAMITSU Nikian

1994年沖縄県育ち。前職はせんだいメディアテーク 企画・活動支援室職員。2022年4月より現職。現在『カロクリサイクル』『KINOミーティング』、ジムジム会、Tokyo Art Research Lab等を担当。「深夜徘徊中、ひとりで歩いている年配の方に声をかけるかいつも悩みます」

6 大川直志 (2024～) OKAWA Tadashi

1988年和歌山県生まれ。武蔵野市立吉祥寺シアターや秩父宮記念市民会館等、複数の民間・公立の文化施設にて、管理運営や自主事業の企画・制作を担当し、現職。現在『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』、東京都・区市町村連携事業等を担当。「家にいる時間はだいたいラジオを聴いています」

7 岡本絢子 (2024～) OKAMOTO Ayako

1990年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程(修士課程)デザイン専攻情報デザイン研究領域修了。同大学情報デザインコース研究室での勤務を経て、2024年5月より現職。『カロクリサイクル』、Tokyo Art Research Lab等を担当。「最近はフィルムカメラで遊んでいます」

「現代・江東ごみ百鬼夜行」 を開催しました。

執筆 川村庸子

では、高度経済成長によって爆発的に増えたごみの処理を担ってきた江東区民の不満が、東京中に議論や抗議活動呼び起こしました。これによって現在の各地域でごみを処理する原則が生まれ、市民のリサイクル意識が高まる契機に。こうしたごみと切っても切れない関係の土地の歴史を、資料や解説、本展のために創作した絵本『ヨンちゃんのごみおぼけ』という過去と未来をつなぐ物語などを通して、読み解いていきました。

また、捨てられた古道具に魂が宿り、群れをなして練り歩くという百鬼夜行の物語をヒントに、家庭で出たごみを持ち寄って、「ごみのおぼけづくりワークショップ」も開催。近所に住む子どもたちに大人気で、毎日のように顔を出す常連さんも登場したそうです。

東京アートポイント計画では、これまで地域のなかでアートに触れる機会をつくってききましたが、こうした自分が立っている場所を知り、これからの時代について考える、その地域ならではの取り組みにより力を入れていきたいと思っています。



被災を経験した土地に蓄積されてきた記録物(禍録)を、表現を通じて現在に応用する『カロクリサイクル』が、拠点のある江東区を舞台にした展覧会「現代・江東ごみ百鬼夜行」を開催しました。これまで何が「ごみ」とされ、どのようにかわってきたのか、歴史の地層を探りながらごみとわたしたちの関係を捉え直す試みです。

江東区は、ごみを埋め立ててきた土地です。埋立地の造成には大火や関東大震災、東京大空襲などの災禍によって発生したがれきが使われ、江戸時代から首都圏のごみを受け入れてきました。1960～70年代に起きた「東京ゴミ戦争」



Artpoint Radio 6 配信がスタート！

Tokyo Art Research LabのYouTubeチャンネルにて、ラジオ形式で東京に点在する拠点や活動について掘り下げる『Artpoint Radio』の配信がはじまりました。トークテーマは「東京を歩く」と「東京で聞く」です。

「東京を歩く」シリーズは、都内各地の拠点を訪ねるインタビュー企画。運営者に、設立の経緯や実践のなかで直面した課題や発見、地域へのひらき方、そして今後の展望を聞いています。2024年度は、ギャラリーとカフェ、シェアハウスを備えた「OGU MAG+」をはじめ、元床柱工場をリノベーションしたギャラリー「東葛西1-11-6 A 倉庫」など、東京都内の8拠点をめぐり、かれらの声とともにレポート記事を公開しました。

続く「東京で聞く」シリーズは、領域やエリアを横断しながら活動している実践者との座談会企画。「都市に暮らす人々がより多様な未来を想像できるまちをつくる」をコンセプトに掲げる一般社団法人ニューマチツクリシャに「地域でプロジェクトを広げるために必要なこととは?」と尋ねてみたり、山梨県でアーティスト・ラン・レジデンス「6okken」を運営する筒|tsu-tsuさんと、各

地でさまざまなチームをつくり企画を行っている吉田山さんのお二人に「コレクティブやチームづくりで心がけていることは?」と問いかけてみたり、現在地を確認し、未来を想像するための対話を行っています。また、制作チームが各拠点を訪れるなかで見えてきた「いま」の拠点の特徴やこれからの東京の風景について語り合う回も。地域で活動している人にとっても、拠点を構えたいと考えている人にとっても、ヒントが得られるようなコンテンツを目指しています。[▶ p.09]



(撮影 | 齋藤彰英)

展覧会「DeafSpace Design ろう者の身体×家」を開催しました。

執筆 川村庸子

ンを学んできた研究者。「欧米のデフスペースを研究していると、国や地域、文化が異なるのにデフスペースデザインにはあまり大きな違いがないんです」と、ろう者の身体感覚を基点とした空間デザインのおもしろさを語りました。

会場となった台東区にある「5005 (ゴーマルマルゴ-)」は、2023年に日本で初めてデフスペースデザインの概念に基づいてリノベーションした空間。ろう者がこれまで自分たちで獲得してきた技術や経験を記録し、発信する文化拠点として育てていきたいと思っています。



視覚言語(日本語)で話さる者・難聴者・CODA(ろう者の親をもつ聴者)が主体となり、一人ひとりの感覚や言語を起点とした創発の場をつくることを目指す『めとてラボ』。ろう者の感覚や独自の行動様式、ろう文化を取り入れたデフスペースデザインのリサーチを重ね、展覧会「DeafSpace Design ろう者の身体×家」を開催しました。ろう者の家族が暮らす二つの家を、写真と映像を通して紹介し、心地よい空間のなかにあるデフスペースデザインを探る試みです。

例えば和田邸では、ろう者が開き戸の付近でぶつかりやすいため、家の扉を引き戸にしたり、扉の向こうの情報を得られるよう、透過性のある素材を用いたり。湯山邸では、仕切り壁を低くすることで、フロア全体を見渡せて家族の存在を感じられるなど、至るところに工夫が散りばめられています。

会期中は、建築の専門家らを招いたトークを行い、ろう者の身体感覚や行動様式の豊かさについて議論を深めました。モデレーターを務めた福島愛未さんは、アメリカにあるろう者のための大学・ギャロレット大学でデフスペースデザイ

になっています。

現在、ミーティングのレポートをTokyo Art Research Labのウェブサイトにて公開中。毎年3月にせんだいメディアテークが主催している企画『星空と路』では、関連イベントとして「わすれん! 記録活動ミーティング——能登から/能登へ——」も開催されました。コミュニティ・アーカイブが災害の渦中でいかに機能することができるか。東日本大震災の経験を能登につなげていくために、引き続き議論を重ねていきます。



「コミュニティ・アーカイブ」 ミーティングを重ねています。

執筆 川村庸子

市民の手によって、地域の記録を残し、活用していく「コミュニティ・アーカイブ」。2024年に発生した能登半島地震と豪雨被害をきっかけに、その技術と経験を複数の地域から集めて、共有する場をつくっています。東日本大震災後の復旧・復興プロセスを記録・発信するプラットフォーム「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を運営しているせんだいメディアテークと連携し、『カロクリサイクル』、そして、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo」の知見を活用したディスカッションを行いました。

今年度開催したミーティングでは、能登で支援に携わっている人々をゲストに招き、現地の状況や課題、アーカイブに関するニーズを掘り下げたり、関連する活動のヒアリングをしたりしました。現地からの「自分に向けて語ってくれた言葉をどのように扱ったらいいのだろう」「記録に関する権利処理をどうしていくべきか」などの声に対して、メンバーそれぞれが自分の考えや経験を分かち合う。そうしたやりとりを通じて、コミュニティ・アーカイブの手法を紐解いていくような場

執筆 梶谷勇介

拠点から 「いま」の東京を考える



小山 冴子
OYAMA Saeko

アートに関する拠点をめぐりながらインタビューを行い、東京について考える「Artpoint Radio」。その制作を通して見えてきたことを語ります。

自分なりの風景をつくっている場所

—— 新しくスタートしたArtpoint Radioをはじめたきっかけを教えてください。

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOに伴走しながら16年間文化事業を行ってきました。ですが、これからも社会に応答する活動を続けるためには、現在の状況や、各地でどのような人が活動しているのかを知っておくことがとても重要だと考えています。

これから区市町村との連携も増えていくなかで、地域の課題や今後の取り組みについて相談された際には「この地域にはこういうコミュニティや活動がありますよ」とすぐに応えられる存在でありたい。そのためには、やはり地域のなかにある小さな拠点は大事だし、ただSNSで動向を追うだけではなく、できるだけ現地に足を運んで、運営している人の言葉を通して拠点の性質を知る必要があるなど。そう思っはじめた、リサーチとネットワークづくりを目的とした取り組みです。

—— 実際に訪れる拠点は、どのような基準で選んだのでしょうか？

一番大事なのは、主体性もち、草の根的に活動をしている団体であることです。なかでもギャラリーや書店などの特定の機能にとらわれずに、運営者の視点が見え、自分なりの風景をつくろうとしている場所を選んで訪ねました。

今回訪れたのは、設立から5年以内、あるいは2020年前後にリニューアルを試みている8つの拠点



Tokyo Art Research LabのYouTubeチャンネルで公開中の『Artpoint Radio』の再生リスト
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLGPir6obOjajWBQhuPF6tBPepx483qWa>

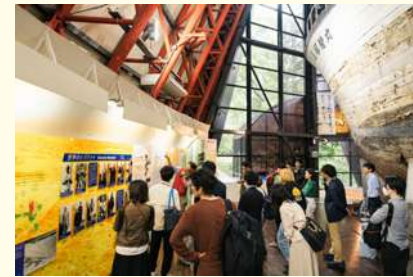


「パートナー」をテーマに ジムジム会を行いました。

東京アートポイント計画では、6つの共催団体とともに「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」(通称:ジムジム会)を開催しています。それぞれの悩みを持ち寄って学び合う「互助会」のような取り組みです。今年度のテーマは「パートナー」。どの団体も共催期間が3年以上になり、地域との関係性が育まれてきたことをきっかけに、それぞれの現場を訪ね、地域のパートナーとの協働について学ぶ会を全4回開催しました。

第1回は、『カロクリサイクル』が活動のさまざまな場面で連携している都立第五福竜丸展示館へ。アメリカの水爆実験で被曝した第五福竜丸と乗組員の被害、そして核の脅威を伝える展示をめぐり、「災禍の記憶をいかに伝えるか」という同じ関心のもと、両者がどのように協働しているかについて、『カロクリサイクル』を行っているアーティストの瀬尾夏美さんと学芸員の蓮沼佑助さんがトークを行いました。蓮沼さんは、説明をする側/される側という固定化した関係ではなく、「NOOKのようにオリジナリティのある企画で展示館を活用してくれる人たちを求めている」と語ります。違うけれど似ている、横のつながりがあることで、互いの活動に幅が生まれているようです。

第2回は『ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)』と市内に点在するアトリエなどの拠点へ。第3回は『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』と昭島市立光華小学校を訪ね、第4回は『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』と10年以上協働している足立区シティプロモーション課に話を伺いました。詳細は、Tokyo Art Research Labのウェブサイトにあるレポートをご覧ください！



(撮影 | 小野悠介)

今年も6点の 発行物ができました！

『地域を生きる』では、「地域を知る—知る」とは何か?」「調べるって?」「きっかけについて考える、やってみる」「つながりをつくる、育てる、引き継ぐ」「振り返る」という5つのステップに分けて、地域と学校の連携事例を紹介。アーティスト、先生、地域といった複数の目を通して、互いの有機的なかわり合いの模索が描かれています。

Tokyo Art Research LabのウェブサイトではPDFを公開中。希望者には、着払いにて郵送も受け付けています。



アートプロジェクトの思考や手法を「残すこと」「伝えること」に注力してきた東京アートポイント計画。今年発行した6点の制作物のなかから、注目の2点をご紹介します。

『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』では、2022年度から多摩地域の小学校の図工の先生とともに素材と技術を学ぶ「ざいしらべ」を行ってきました。個人では手に入れにくい自然素材を手に入れ、その背景にある地域の歴史や伝統的な技法を学び、授業で子どもたちの表現や造形の拡張を促す学びのネットワークです。その学びを「地域と学校の未来を考える」をテーマにした冊子シリーズ「つくることを考えてみよう」として、これまで『竹編』と『広葉樹編』を発行しました。そして、今年度新たに制作したのが、『表現のひろがり可能性をめぐると『地域を生きる』です。

『表現のひろがり可能性をめぐると』では、昭島市立光華小学校に45日ほど滞在したアーティストの弓指寛治さんの活動記録と、原爆の図丸木美術館学芸員の岡村幸宣さんと美術家の呉夏枝さんのインタビューなどを収録。

です。肌感覚ではありますが、こうした小さな拠点は3年ほどで閉じることが多いように思います。そうしたなかで、5年ほど続いている拠点は「続けていくための仕組み」をアップデートしていたり、3年ほど経った拠点はまさに変化の前にいたりしていました。そこで運営している人たちに、これまでの経験や発見を聞かせてもらいたいと思ったんです。

暮らしに身近な拠点をひらく

—— 拠点を構える限り、まちとのかかわりは切っても切れないと思いますが、各拠点はどのような関係を築いているのでしょうか？

どの拠点も積極的にまちに働きかけていこうとするよりは、そこで続けていくなかで、だんだんと地域に受け入れられていっている印象ですね。品川区の住宅街にある「コウシンキョク-交新局」(以下、コウシンキョク)は、普段は美術家の平山匠さんのアトリエとして使われているのですが、同時に誰が来てもいい公民館のような場所でありたいと、展示はもちろん陶芸教室的なことも行っています。「的な」というのは、平山さんが教えるのではなく、陶芸をやらなくてもいい場だからです。各自が好きなものをつくり、手を動かしながら時間を共有することを重視している。上下関係や教える／教えられるといった固

定的な関係性が生まれることが嫌だと言っていたのが印象的でした。平山さんは、近所の人と会話をしながら次の作品のヒントを得ることもあるそうです。

リソグラフの印刷工房でもある大田区の「Hand Saw Press」も、純粋にものづくりを楽しむ場所であることを大切にしながら活動しています。住宅地にあるため、近隣の子どもが遊びにくることも。アーティストはもちろん、会社員や趣味で冊子をつくる人などさまざまな方が利用されるそうです。企画したイベントで出会った人同士が新しい活動をはじめることもあるそうで、運営メンバーの安藤僚子さんは「お客さん同士の交流によってものづくりが広がっていく様子を見て勇気をもらい、そのためにやっている」と語っていました。そうした一人ひとりが主体的に動き出す土壌をつくる意識は、わたしたち東京アートポイント計画が取り組んできたことにもつながりますね。

いずれも、いわゆる「アーティストによるアート」に限定されない、もっと広義な「表現」に触れられる場所として、まちとの相互作用のなかで徐々に機能が輪郭を現していくような拠点多いように思いました。

—— 今年度は8か所の拠点を訪れましたが、そのな

かで見えてきた傾向はありますか？

最近の拠点は、例えば、好きな海外のアーティストを呼んで展示をしてもらおうようなショーケースとしての機能よりも、身近な人との交流に軸足を置いている場所が多い印象があります。例えば、荒川区にある「OGU MAG+」では互いに好きな素材を持ち寄って手芸をする「チクマグ〜針と糸、あるいはおしゃべり〜」を行っていて、穴が空いた靴下を繕ったり、刺繍をしたりしているのですが、その中心はお喋りなんです。ものづくりをしながら互いにポロッと出てくる話をきっかけに、自然と仲が深まっていくような居場所づくりが行われています。

それから、最近はキッチンを備えたスペースも増えました。これも同じように、いろいろな人が集まったときにそこにおいしい食べ物があれば会話が弾み、仲も深まりますよね。そう考えると、ある程度のゆるさをもってつながって、対面で交流することをみんな求めているんだろうと思います。

—— 共通して抱えている課題もあるのでしょうか？

やはり続けていくことの難しさですね。どのように企画を立て続けていくか、どう活動を広げていくか、あるいは広げていかない方がいいかという問いはみんなにあります。東京という場所柄、費用面のやりくりは常にあるし、複数人で立ち上げた拠点は、それぞれの人生のステージが変わっていくなかでの変化を理由に、数年で閉じてしまうケースも少なくない。一方で、続いている場所でも、どのようにアップデートすれば自分たちも受け取ってもらう人も新鮮に感じ続けられるかといった課題があります。

なかでも印象に残っているのは、15年間も続いている「OGU MAG+」。ギャラリーはもちろん、カフェも併設していて2階はシェアハウスとして運営されている場所です。代表の齊藤英子さんは、長く続けるコツは「しぶとさ」と「人に頼ること」だと笑って話されていました。隣接するカフェの切り盛りもときにはご家族に任せたり、お客さんからの相談ごとは近



「OGU MAG+」でのインタビュー風景 (撮影 | 齊藤彰英)

所の人にも頼ってみる、企画も誰かと協働するなど、周りにいる人たちと積極的に頼ったり頼られたりする関係を築いている。そうすることで自分が疲れすぎないようにしているし、ほかの人がかかわり続けられる余白が生まれるんです。「これからはもっと若い人にも任せられるようにしたい」とも語っていました。

—— 続けていくための方法は、この活動が一つのヒントになりそうですね。

どのスペースにも歴史があります。わたしたちがそれを聞きに行くことで、変化を記録し、新たなつながりを生み出すきっかけになればと考えています。今後は、それぞれの拠点同士で運営のあり方を話したり、一つテーマを立てて議論したりすることで、拠点同士の交流を促進できるような活動も増やしていきたいですね。

話を聞くなかで最もおもしろいのは、その場所について知れることはもちろん「この人だからこういう場所になったんだ!」と、運営者の考えがその場所のありように紐づいていると感じる瞬間。かれらの人となりを知ることで拠点に対する関心が高まっていくと思うので、いま活動している拠点とそれを運営する人たちを紹介するプラットフォームとしても機能していければと思っています。



「Hand Saw Press」の作業スペースの様子

「そのままでいられる」 環境をつくる



櫻井 駿介
SAKURAI Shunsuke

ウェブサイトを「みんな」が使えるものにするにはどうすればいいのか。
ウェブアクセシビリティの向上に取り組んだりリニューアルの歩みを振り返ります。

「みんな」を問い直すところから

—— 2022年度からTokyo Art Research Lab (TARL)のウェブサイトをリニューアルしてきましたが、どのように取り組んだのでしょうか？

そもそもアクセシビリティや情報保障について日常的に考えるようになったのは、2022年度に視覚言語を使う『めとてラボ』との共催事業がはじまったことがきっかけです。ろう者や難聴者、CODA（ろう者の親をもつ聴者）の人々とやりとりするなかで、手話やろう文化、視覚身体言語を通したコミュニケーションを想像する機会が増え、さまざまなアクセシビリティを捉え直していくことに。もともと「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」という企画を担当していたのですが、そこでの経験を思い出しながら映像配信の手話のワイプを検証したり、トークイベント「Artpoint Meeting」に手話通訳を導入したり、試行錯誤を続けてきました。

TARLのウェブサイトに関しては、文化事業の一環として運営しているため、なるべく多くの人にとって使いやすいことを意識してきましたが、「みんな

な」という対象をどれほど想像できていただろうかと、だんだんと疑問が湧いてきたんです。そんな話をウェブディレクターの萩原俊矢さんと交わすなかで「ウェブアクセシビリティ」という考え方があるということを教えてもらい、一緒にTARLのウェブサイトを見直すことになりました。

まずは誰に届けたいかを定めるために、ペルソナ（架空のユーザー）を立てることからはじめました。そこに障害当事者を想定すればいいわけではなく、誰もが使いやすいかたちを目指すことが大切です。例えばスクリーンリーダー（音声読み上げ機能）を使う人もそうでない人も違和感の少ない方法でウェブサイトを使える。個人の特性によって情報量の差が生まれないように意識し、最後は使う人が選択できる状況をつくることを目指しています。

—— 具体的には、どのようなことをしたのでしょうか？

2022年度から複数回にわたって障害者専門クラウドソーシングサービスを行っている『サニーバンク』と協働して、さまざまな障害のある人にユーザーレビューをしてもらい、改善点を洗い出していまし

た。「真っ白な面が多いとまぶしく感じる」「スライドショーが自動で切り替わると、音声の読み上げがうまくいかなくなる」といったフィードバックを受けながらつくっていきました。ものの見方が変わる貴重な経験でした。

2024年度は、その次の段階を目指すために、TARLで「わたしたちの“ウェブアクセシビリティ”を考える」というプロジェクトをはじめました。アクセシビリティを突き詰めていくと、どのウェブサイトも似たようなものにならないか。そこにクリエイティビティはどうかかわれるのか、イメージしきれてない自分がいて。また、一人ひとり異なる特性や考え方があるなかで「障害」という言葉で一括りにしてしまう違和感や、それらを誰かと共有する言葉をもち合わせていない感覚もありました。

ウェブサイトという環境を軸に考えると、例えば、先天的に目が見えない人もいれば後天的な人もいて、弱視の人も全盲の人もいる。スクリーンリーダーを使ってもツールが異なることもあります。そのため、まずはどう改善できるのかという答えを導き出すのではなく、さまざまな生活や文化を背景にしたユーザー体験の豊かさや心地よさについて、さまざまな人と話をしながら探っています。

そのなかで考えたのは、わたしの思う「カッコいい」とか「きれい」という言葉やイメージについて、その基準を勝手に相手に押し付けていないかということです。まだ整理はできていませんが、自分たちの前提を問い直す必要があるなと思いはじめています。

文章における「句読点」のように

—— どうすれば使いやすいくなるかよりも、もう一度自分たちの感覚を疑ってみるところからはじまったということですね。前提を問い直す、という部分をもう少し詳しく聞いてもいいですか？

誰かとコミュニケーションをとるときに、どうしても自分の経験や考えを判断基準にしていることが多い

など。「カッコいい」という基準の話で言えば、そもそも「カッコいいウェブサイトがある」という前提から質問を投げかけているわけで、そんな風に自分のなかにある前提をいかに崩して、また考え直すことができるか。そこが意義深く感じる部分でもあり、同時に難しさを感じる部分でもあります。

アクセシビリティを向上させることは、一朝一夕でできることではないので、いまはまだそれがコストとみなされている面もあると思うんです。そんななか、文化事業は、ある意味で「実験の場」としての役割があると考えています。もちろん、ある程度社会への実装を目指した責任ある実験の場です。なので、わたしたち文化事業者がこうした試みを率先して進めていくことで、社会全体が同じように取り組むハードルをなるべく下げていければと考えています。

それから、「柔らかなモデル」をつくることも大切ですね。アクセシビリティの前提にあるのは、その人が「そのままでいられる」入り口や環境があること。これは障害の有無にかかわらず、わたしたち一人ひとりの居心地のよさにも通じることです。そうした環境をつくるためには、組織にとってチェックリストやマニュアルのような存在は心強いと思いますが、つくり方や使い方によって「これさえ対応しておけばいい」という固定された雛型になってしまう。その明快さが重要な場合もあると思う一方で、本来は



アクセシビリティや情報保障についての取り組みについて、「柔らかなモデルをつくる」と題した記事をnoteに連載している
https://note.com/tokyoartpoint/m/m6390e171af13



生活より手前のことに 目を向ける



川満ニキアン
KAWAMITSU Nikian

海外に(も)ルーツをもつ人たちがともに1本の映画をつくるKINOミーティング。
初めての映画づくりに挑戦した3年目を迎え、これまでの活動を振り返ります。

語りを引き出す「シネマポートレート」

——今年度制作した新作映画『オフライン・アワーズ』について、詳しく教えてください。

20～30分の作品を3本つないだオムニバス映画です。それぞれ春・秋・冬の東京が舞台で、ストーリーやキャストを変えて撮影しました。これまでの2年間はKINOミーティング(以下、KINO)の前身となるチームがつくった映画『ニュー・トーキョー・ツアー』でも用いた「シネマポートレート」というワークショップを中心に活動していましたが、徐々に参加メンバーも定着してきたので、その関係性やスキルをいかして一度映画をつくってみよう。それが今年度の活動です。物語はメンバーのエピソードがベースになっています。シネマポートレートでの、役割を固定化させない仕組みを現場に取り入れながらメンバー全員で制作をしています。

シネマポートレートは、3人1組になってまちを歩き、お互いのルーツを探すというもの。3人には「探す人」「録音する人」「撮影をする人」という役割が与えられ、まちを歩きながら「探す人」が自分のルー

ツにかかわることを発見し、その体験やエピソードを語ります。それをほかの2人が録音し、撮影。3つの役割はローテーションして全員が語り手と聞き手を経験するのも特徴的です。そこで語られたエピソードを写真とともに2～3分の映像作品にして発表するまでが一連の流れでした。

——今年の活動には、どのような人が参加しているのでしょうか？

これまでのワークショップに参加した経験のあるメンバーを中心に声をかけ、手を挙げてくれた15人で活動しています。中国、台湾、エジプト、日本などルーツはさまざま。「ルーツ」というと国籍や血筋といったイメージがあるかもしれませんが、KINOで「海外に(も)ルーツをもつ」と「(も)」をつけているのは、ルーツへの意識を広く捉えたいと考えたからです。このプロジェクトでは、異なる背景や文化をもつ人同士が、映像制作を通して新たな協働のあり方や表現の可能性を発見することを目的にしているので、メンバーそれぞれがルーツに対してどのように考えているかを大事にしています。

それぞれが個別に思考するからこそ意味があることですよ。

なので、可変的に試行錯誤できる柔らかなモデル、言い換えるならば思考を促したり、更新できる仕組みやきっかけをつくったりすることで、悩み続けていんだと思える環境づくりがしたい。つまり、文章における「句読点」のように、立ち止まって次を考えるものを残したいなど。

——今後の目標についても教えてください。

具体的などころだと、今年度リリースしたTARLのウェブサイトの「年表」機能の運用があります。これは主に2011年以降の社会的な出来事と、その年代に生まれたアートプロジェクトや関連する動向を一望できることを目指した機能です。絞り込み機能によって特定の年代や実践の形式に絞って表示できるなど、さまざまな切り口でアートプロジェクトに関

する歴史を振り返ることができます。

まだベータ版としてリリースしたもので、まずは改善できそうな点を見つけるところからは始める必要があると思っています。こうした年表に限らず、ウェブサイトはつくって終わりではなく、更新しつづける責務がある。なので、担当だけではなく、チームの誰もがウェブサイトに込めた思いを汲み取って更新できる仕組みをつくりたいですね。

また、アクセシビリティに関する取り組みとそのプロセスをきちんと発信していきたいです。もし現在が、誰もが自分のままでいられる社会であれば、わざわざアクセシビリティを強く押し出す必要はありませんが、まだそこには至っていません。イベントを実施する際に「手話通訳があります」と意識的に発信するなど、いまは公の目に触れる機会を増やしていくことで、社会に少しずつでも影響を与えられる可能性があるのではないかと考えています。



2025年1月に公開した
TARLウェブサイトの「年表」ページ



『オフライン・アワーズ』制作の様子



困難を乗り越えるための対話

—— 背景や文化の違う人たちが一緒に作品をつくる際に工夫しているのはどのような点ですか？

やさしい日本語を使って、語り合うことや聞くことを重視した場づくりを行っています。映画制作の現場では、演出部・俳優部・美術部・技術部などに役割が分かれているのが通例なのですが、KINOの現場では作品ごとにチーム編成を変えています。春は演出部だったけれど、秋は技術部というように。役割を固定させないのはいくつか理由があり、映画制作を初めて経験するメンバーが多いことや、メンバーの関係性を深めること。それから映画の現場は監督がつくりたいものをかたちにするトップダウンの構造になりがちですが、KINOでは役割を流動的にすることで、特定のリーダーの意見に従うのではなく、メンバー全員の意見やクリエイティビティを引き出せるように心がけています。

—— 強いリーダーがおらず、関係性が動き続けるというのがKINOミーティングのスタイルなのですね。

ただ、振り返ると大変なこともありました。初めて映画づくりに取り組んだ春の撮影は、特に課題が多かったです。20分以上の作品となると、やはり作業

時間も長くなります。技術を習得しつつ作業を進め、作品としてのクオリティも考える。でも、決めてくれる人がいるわけではないし、時間は限られている。余裕がなくなり、第一言語のみでのやり取りが行われ、意見がぶつかる場面もありました。クリエイションとして目指したいところと、現実的な技量や作業量のバランスを取るのとはとても難しかったようです。

1本目の撮影以降は、事務局スタッフの間で課題と対策を整理し、2本目の制作初日にオリエンテーションをしました。そこでは役割をローテーションする意味を言語化するとともに、スケジュールの見直しや準備不足について改善点を話したり、第一言語や価値観が異なるからこそそのコミュニケーションの取り方についてあらためて考えたりしました。こうした時間をもった甲斐もあり、2本目の撮影からはコミュニケーションが密になり、準備や撮影の進め方もスムーズになりました。役割別に自主的に集まるなど、それぞれの現場への意識も高まりましたね。

映画制作を通して、相手と自分を知る

—— 「こうあらねばならない」といったルールではなく、みんなで大変な思いをしたからこそ「これだけは守ろう」といった指針が生まれたのですね。

チームで一つの作品をつくる時、当然ながらすれ違いや意見の相違は発生する。でもそれをそのまま発したり、行動したりするのではなく、どんな言葉や姿勢で伝えれば、このチームでものづくりを続けられるかを考えながら進められるようになったと感じます。3作目では、よりよい作品にしていくためのアイデアも積極的に飛び交うようになりました。

—— あらためて、この3年間を振り返っていかがですか？

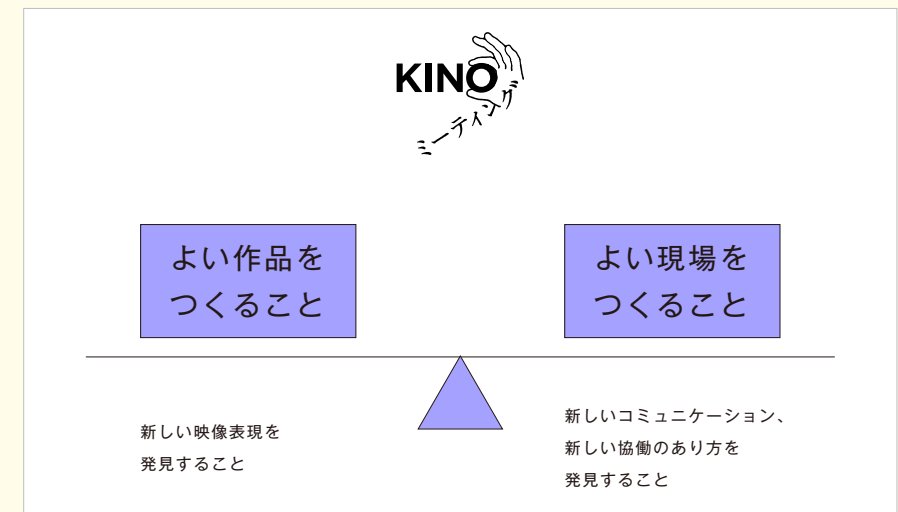
KINOは「多文化交流」や「国際交流」と呼ばれる事業のなかでも珍しいプロジェクトかもしれません。多文化共生の取り組みというと、外国人が日本で暮らすための教育・居住環境や日本語の支援といった生活へのサポートがまず思い浮かびますが、KINOは違うアプローチをとっています。映像をつくるを通して、目の前の相手がどんなふう生きてきて、どんなふうにものごとを考えているのか。何が好きで、何が苦手なのか。そういった当たり前だけれど、見落としがちなことについて考えることを、この3年間やってきたのだと思います。つまり、自分と異なる他者のことを理解したり、想像したりするという、生活よりもさらに手前のことに目を向けているんです。

それは、映像作品をつくるというゴールがあるから

実現できている面もあるでしょう。作品づくりは自分のルーツを語る場所からはじまりますが、一人ひとり異なるルーツに対して、映画をつくる過程でフィードバックをもらってこれまでの視点が変化します。あるいは完成した映画を観て、それまでの出来事を肯定したり、表現をする意義を獲得したりします。「映画をつくる」という仕掛けのもと、ほかのメンバーの背景を知るだけでなく、自分自身とも出会い直していくんですね。

—— お互いの存在を確認し、認め合うプロセスはケアの一面もあるのかもしれないね。初年度から参加しているメンバーはどのような動機で続けているのでしょうか？

最初はおもしろいプロジェクトに参加してみたい、という人が多かったと思います。でも継続的に参加してくれているメンバーのなかには、映画をつくりたいという思いとともに、KINOが一つの居場所になっているから、という理由もあると思います。メンバーは、これまでさまざまな国や地域を移動してきた人が多いので、今後また違う場所へ移動しても、このプロジェクトでの経験を誰かに受け渡していく広がりや生まれることを期待しています。また、来年度は、KINOがこれまで開発してきた手法や取り組みの意義を伝え、より多くの人に活動を届ける場をつくり出せたらと思っています。



オリエンテーションで共有した資料の一部

誰かと一緒にやることの可能性



佐藤 李青
SATO Risei

東京都・区市町村連携事業のスタートによって事業説明の仕方を更新した東京アートポイント計画。NPOを中心に据えた文化事業のあり方について語ります。

NPOが核となる文化事業

——今年度、東京アートポイント計画の事業構造の図を改変しましたが、どのように変わったのでしょうか？

NPO、東京都、アーツカウンシル東京の三者が連携する座組自体は変わっていませんが、NPOを核に、各自治体や各団体と連携を築く活動であることを強調しました。見直すきっかけは、「東京都・区市町村連携事業」（以下、区市町村連携事業）に取り組むようになったことです。これは都と区市町村の連携によって芸術文化に触れる機会を増やすことを目指す事業で、今年度から東京アートポイント計画のノウハウを活用し、都と区市町村、NPOなど事業を動かす担い手に伴走しています。

東京アートポイント計画では、これまでも区市町村と連携してきました。例えば「アートアクセスあだち音まち千住の縁」（2011～2021、2024年）は足立区と、「小金井アートフル・アクション！」（2011～2020年）は小金井市と。こうした経験をいかした枠組みにしたいと考えているのですが、それをどのように区市町

村に伝えようかと考えたときに、NPOが軸となる文化事業であることが重要だと気づきました。

——あらためて、東京アートポイント計画が進めてきた「NPOが軸となる文化事業」とはどのようなものですか？

文化事業と言うと、美術館やホールといった文化施設をイメージすることが多いかもしれませんが。わたしたちの所属する東京都歴史文化財団も都立の文化施設を運営していますが、その担い手の多くは施設の職員です。一方、東京アートポイント計画では、各地域に拠点を構えるNPOスタッフが中心で、その多くはまちに住む人たち。事業を行う会場も公共施設に限らず、空き家や空き店舗、公園など、暮らしに近い場所が含まれます。地域に住む人との距離が近いところで、自治体や企業などさまざまなパートナーとともに活動をつくり、参加者の関係づくりや主体的な活動を後押ししていく。NPOが、地域の多様な「かかわりづくり」をするエンジンのような役割を果たすわけです。それによって、これまで大小たくさんのコミュニティが生まれてきました。

また、地域課題に直結した企画も多く、芸術文化の領域を超えて教育や福祉、ケア、多文化共生などあらゆる分野とつながりをつくっていけることも特徴です。

コミュニティが生まれ、多分野とつながる

——具体的に、文化事業を通してコミュニティが生まれた例を教えてください。

国立市と連携しながら活動している『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』がよい例だと思います。わたしたちと共催事業を行って4年目の今年、「ただの店」と「GREEN GREETINGS（グリーングリーティングス）」がスタートしました。

「ただの店」は、お金を介さない活動を通じて、まちに新たなつながりを生み出す試みです。「自分の好きなことや得意なことから、まちで仲間づくりにチャレンジをしてみませんか？」と募集をかけ、現在、ACKTの拠点である「さえき洋品●（てん）」で7組がお店をはじめています。例えば、好きなレコードやCDを持ってくとプレイヤーで再生できる「Re:Birth Players」は、音楽をかけながらただ一緒に過ごすお店で、流れる曲をきっかけに話が広がって盛り上がっています。ほかには洋裁の相談にのってもらえる「むすぶ店 チェルシー洋品店」など、

週末を中心に順番にお店を開いています。

——「ただの店」の店主は、国立市内の人が多いのでしょうか？

近隣の地域からも参加していますが、やはり市内にネットワークがある人の店は集客しやすいようですね。定期的にお店同士が交流する会では、互いのネットワークが混じり合い、それぞれの活動の課題解決につながっているようです。つながりを広げ、コミュニティが育まれると同時に、まちの人の「やってみたい」という思いを実現できる場、つまり文化の新たな担い手を発掘する場にもなっています。

「GREEN GREETINGS」は、さえき洋品●（てん）の近くにある「谷保駅南口緑地」を新たな交流拠点として整備する活動です。JR谷保駅の目の前という好立地をいかして交流する場所にできないかと、市の環境政策課と連携し、ACKTが企画しました。2024年の夏から参加者を募り、樹木や草花の手入れなどを行っています。近隣で活動するコミュニティガーデナーの長阪雅子さんに、抜かない雑草の見分け方や生垣の剪定方法、剪定ばさみの使い方などを教えてもらうなどして、月に一度のペースで活動しています。



「ただの店」の「Re:Birth Players」と「むすぶ店 チェルシー洋品店」の様子



変化の時代、 アートを生活の一部に



森 司

MORI Tsukasa

文化事業者にとって2024年はどのような年だったか。
コロナ禍で失ったものに目を向け、文化の必要性について語りました。

「参加のデザイン」をする

—— 2024年を文化事業者としてどのように感じていますか？

昨年のこのインタビューでは、コロナ禍が収まり日常が戻りつつある一方、文化事業の現場にコロナ禍前とは何かが違うという「ズレ」が生まれていると話しました。今年は、そのズレのなかで多くのものが失われたことを実感した1年でした。以前、共催事業を行った三宅島では、2000年に発生した火山噴火による4年5か月の全島避難の結果、お祭りが風化してしまった。それと近いことが、至るところで起きています。

何が失われたかと言うと、知識・技術・経験など「知見」と呼ばれるものです。以前は誰もが「当然そうだね」と暗黙知としてもっていたものが、通用しなくなりつつある。これは文化の送り手と受け手、両方に言えます。見方を変えれば、知見を途切れさせずに維持できた現場はより強くなるし、失った現場は地盤沈下してしまう。そんな瀬戸際にあるのではないのでしょうか。

特にそれを感じたのが、『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』が毎年開催するアートプロジェクト「Memorial Rebirth 千住」(通称:メモリバ)での、運営側と参加者の違いでした。メモリバは2012年から続いており、運営チームにはコロナ前から担い手が育ち、地域コミュニティが生まれていました。そのため、コロナ禍で中止となり、今回4年ぶりに開催しても、約6,500人を動員する現場を継続して行うことができました。

他方、参加者はそうではなかったのです。メモリバでは無数のシャボン玉が舞うなか、みんなで輪になって踊ります。以前に参加したことがある人であれば、踊りながら移動することを知っています。しかし、今回は舞台を前に座り込んでしまい、「鑑賞者」として楽しむ意識の人が多かったように感じました。

—— そうした受動的な状況に対して、どのような対策を考えていますか？

現場の運営マニュアルを用意する必要性を感じますね。従来はおもしろい企画をつくり、そこよいく広報があれば、あとは参加者が自分で楽しんでく



「GREEN GREETINGS」の
活動風景

文化の担い手はすぐそばにいる

—— 「GREEN GREETINGS」がスタートして半年ほどですが、変化などはみられますか？

「どのようにこの場所を使っていこうか」「どんな場所を目指そうか」と参加者同士が対話しながら進んでいます。自分たちで手を入れていく過程を通し、場所に愛着が生まれ、どうすればいいかを自分なりに考える人が増えていく。活動していると、緑地のことを気にしていた近隣の人が声をかけてきたり、刈り取った草は環境政策課の人たちが片づけてくれたり、ゆるやかな連携の芽が出はじめています。

「ただの店」も「GREEN GREETINGS」もコミュニティをつくり、まちのなかに自分の「居場所」をつくる活動になっているんですね。両者ともアートに限らず領域を横断するプログラムで、これまで出会わなかったまちの人同士をつなぐ可能性を秘めている。一緒に活動するメンバーが年々増えている手応えがあります。

実は文化の担い手や資源は、じっと目を凝らすと、自分のいる地域にたくさん存在しています。そこにACKTのような「つなぎ手」としてのNPOがいることで、それぞれの関係が編み直されたり、一つの活動が新たな活動へと飛び火したりしていくことがあ

る。それは地域での芸術文化の接点を増やすことであり、生活を豊かにすることにつながっています。行政が単独でやるには苦手なことなので、まちのなかでしなやかに動くNPOがパートナーであることが大事。NPOにとっても、自治体の協力によって実現できる事業の幅が広がります。東京アートポイント計画が、NPOを「軸」に取り組んできた意義をあらためて実感しています。

—— 今後の区市町村連携事業の展望はありますか？

区市町村連携事業を終えた、ある自治体の担当者は「わたしたちがNPOと一緒にやっているのは楽しいから」だと話してくれました。「行政が企画すると堅苦しい事業になってしまうけれど、NPOが企画するとその場や雰囲気を変える力がある」と。自分たちだけで事業をつくるのではなく、誰かと一緒にやることのよさを実感したそうです。

まちなかでのNPOをパートナーとした文化事業の経験は、まだまだ自治体の担当者には少ないのだと思います。みなさん、既にある事業だけでも多忙です。それでも、新たな一步を踏み込んでもらいたい。そのためには、急に大きなプログラムを進めるのではなく、小さな規模で少しずつ段階的に進めることが重要かもしれません。「何を始めるか、一緒に探していきましょう」と、対話を重ね、事業の立ち上げ方から工夫していきたいと思います。



2024年に開催した「Memorial Rebirth 千住」の様子
(撮影 | 富田了平)

れました。けれど、そうした状況が自然には生まれにくくなったように思います。「企画・広報・運営マニュアル」の3点セットを用意し、さりげなく参加を促すようなインストラクションやアフォーダンスを仕掛けるだけでなく、より根本的な「参加の仕方のデザイン」を考えることが求められているような気がします。

文化事業者としては、参加者に「何か」と出会ってもらい、経験をもち帰ってもらうところが肝心で、消費者としてではない体験にこそ本当に重要な「顧客満足度」があるわけです。それで言えば、僕らはこの数年間、障害の有無や世代、国籍などの違いを問わず、あらゆる人たちが芸術文化と出会い、参画するために、アクセシビリティの向上に取り組んできました。そこで得た知見をいかしながら、もう一度丁寧に参加のあり方をデザインし、構築していく必要があると考えています。

「意識的な脱皮」をする

—— 2024年度には、東京アートポイント計画の経験をいかし、自治体と組んで行う「東京都・区市町村連携事業」(以下、区市町村連携事業)もはじまりました。そのねらいを教えてください。

背景としては、今後の都の文化行政の方針を示す「東京文化戦略2030」で、区市町村との連携が打

ち出されたことがあります。同時に我々としても、東京アートポイント計画で培ったやり方を、自治体の担当者と共有することに可能性を感じはじめています。従来のように、公募でNPOと出会うだけではなく、最初から自治体に伴走することで、これまで行ってきた取り組みの新しい展開が生まれるかもしれないという期待があります。

一方、既に課題も見えてきています。例えば、行政は「社会課題を解決する」という言い方をしますが、本来「解決」の役割をもたない文化事業を通して真摯に社会課題に取り組もうとすると、課題は何で、何がどこまでできていて、どこから先を文化に期待するかが掴めていないといけません。そして、文化事業としてのあり方をイメージする必要があります。それを自治体の担当者に伝え、地域や社会とかわる解像度を上げる作業をしています。現在、NPOと共催事業を行ってきた東京アートポイント計画を、「NPO型」という表現で説明し、16年間続くDNAは守りつつ、変わりゆく状況に回答し、脱皮するような意識で動いています。

こうした取り組みを展開していくなかでは、実践の手前にある準備や研究の場としてのTokyo Art Research Lab (TARL)も重要です。区市町村との連携にあたって、現在、担当者といろいろな現場に足を運び、人に会ってもらっていますが、要するにこ

の活動は、見たり聞いたりすることから学びがはじまるわけです。既存の活動への助成ではなく、新しい活動をつくるためには、事業を立ち上げる前にある、そうした試行錯誤の時間が重要。その点、我々にはTARLという学びの場があり、それがあがり、ほかにはできない仕事ができると考えています。

自治体と組み、そこにNPOがプレイヤーとして入っていき、芸術文化を通して社会課題に向き合う。その意味では、これまで話してきた「文化やアートで行政課題に回答する」ということが、体制的にもよりはっきりしたと思います。

ここであえて「アートポイント」という言葉を使えば、「アートポイントの社会実装化」です。従来は社会的なモデル事業でしたが、それを「NPO型」として自治体と協働し展開していく。これはよりタフな事業に突入することを意味していて、後退ではなくむしろチャレンジであり、ここからが東京アートポイント計画の本番だという認識です。

ウェルビーイングに向き合う

—— いま、取り組みは始めているこうした事業は、これからの社会のなかで重要性を増していくと思いますか？

そう思います。そこで大切なのは、「アート」の定義です。アートには、投資的なものも、美術館で静かに見るようなものもありますが、それとは違って、日常にかかわるアートプロジェクトのあり方もあります。アートプロジェクトの強みは、アートを通じてコミュニティが生まれることや、自分と他者が違うという気づきを得られることです。こうした活動を、区市町村連携事業のように社会に実装していくことの必要性は、増すというより、必須になっていくのではないのでしょうか。

というのも、今後ますます社会状況が厳しくなるなかで、「豊かに生きる」ということが問われてくると思います。社会的な孤立をどうするか、人生の最期のデザインをどうするか。要するに人が人らしくあるにはどうあるべきか。それを、医療でも宗教でもない領域でウェルビーイングに向き合おうとすると、芸術文化しかありません。

「豊かに生きる」ことは、すべての人にとって自身の尊厳にかかわる問題なので、消費者のままではなく、自らが表現や活動にかかわらないといけない。そのとき、アートプロジェクトの現場のひらき方や、社会へのかかわり方、自分の居場所のつくり方への需要は高まると思います。消費の力に抗い、アートを生活の一部にしていくこと。それができるのが、この事業だと思っています。



東京都・区市町村連携として中野区で行ったワークショップ「みんなでつろう! 音楽の世界~ナカノバ De セッション~」の様子



Tokyo Art Research Labの演習プログラム「新たな航路を切り開く」の活動風景 (撮影 | 齋藤彰英)

事業予算

東京都の年間文化振興予算は、457億8700万円です。そのうち公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織であるアーツカウンシル東京は、46億100万円。わたしたちは、2事業を合わせて年間「8660万円」(外部予算を含む)の予算規模で動いています(2024年度)。予算時点での概算にて、事業予算についてご紹介します*。

東京アートポイント計画 8000万円

[財団予算7600万円+外部予算** 400万円]

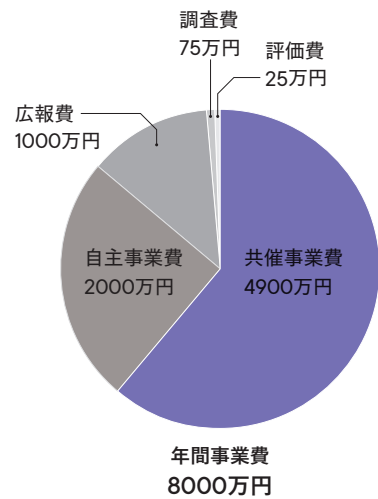
東京都・区市町村連携事業 660万円

*金額はすべて「約」です。 ** 基礎自治体負担金等。

東京アートポイント計画では、共催団体と協議し、毎年予算計画を立てています。どのくらいの規模であれば、無理なく運営ができるのか。事務局を担うNPOの体力や伸びしろを見極め、予算を調整。2年目以降の事業は増額してマネジメント力を鍛えたり、あえて減額して活動の質を高めたりするなど、常に事業の適正規模を探っています。

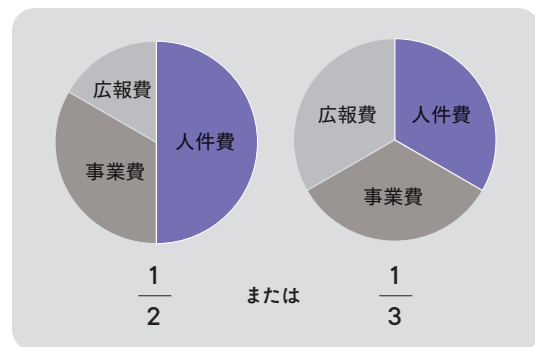
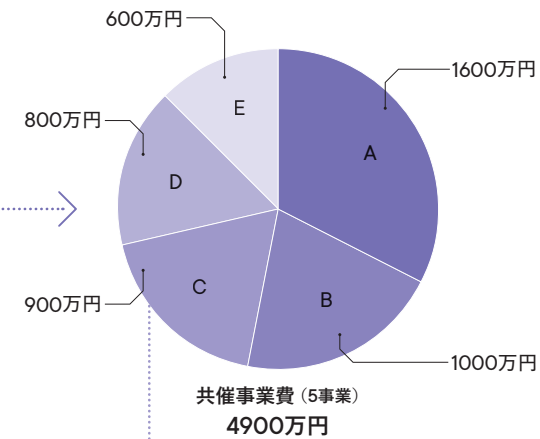
[東京アートポイント計画の年間事業予算内訳]

事業予算の大部分は、「共催事業費」です。そのほかに次代のプログラムの担い手を育てる「自主事業費」、共催団体を含むすべての活動の「広報費」、出張や書籍購入などに使う「調査費」、事業評価の会議にかかる「評価費」があります。



[各共催団体の年間事業予算内訳]

共催期間や事業の目的、特徴に合わせて、適正規模を協議。立ち上げは500万円からスタートすることが多く、それ以降は外部予算の状況により1000万円以上になることもあります。
※東京都の負担金なしで実施している一部事業は、予算から除外しています。



[共催団体における予算の割合例]

一般的にアートプロジェクトにおける助成は、企画制作費に対するものがほとんどで、人件費も含めた支援はまだ国内では多くありません。東京アートポイント計画では、持続可能な活動を行うために、共催団体の「人件費」を全体予算の1/2または1/3の割合になるように設計しています。

事業一覧

国立市

ACKT
(アクト/アートセンタークニタチ)

🏠 さえき洋品 ●(てん)
国立市谷保5014-4
不定期開室
🌐 <https://www.ackt.jp>
▶ p.26

多摩広域
(東村山市、国分寺市、小金井市ほか)

多摩の未来の地勢図
cleaving art meeting

🏠 小金井アートスポット シャトー2F
小金井市本町6-5-3 シャトー小金井2F
不定期開室
🌐 <https://artfullaction.net/koganei-art-spot>
▶ p.26

台東区

めとてラボ

🏠 5005(ゴーマルマルゴ)

台東区谷中3-24-1
不定期開室
🌐 <https://5005place.com>
▶ p.28

足立区

Memorial Rebirth 千住 2024

▶ p.28

江東区

カロクリサイクル

🏠 Studio 04 (ゼロヨン)

江東区大島4-1-1
UR都市機構大島四丁目団地1号棟106
不定期開室
🌐 <http://nook.or.jp/karoku/wp>
▶ p.27

西東京市・中野区・府中市

東京都・区市町村連携事業

▶ p.30

都内各所

KINO
ミーティング

▶ p.27

画集 | ©2021 Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO, Data Japan Hydrographic Association, Landsat/Copernicus, Data IDO-Columbia, NSF, NOAA, 地図データ | ©2021

東京アートポイント計画

▶ ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)



まちを舞台に編まれる芸術と文化

国立市文化芸術推進基本計画が掲げる「文化と芸術が香るまちにたち」の実現に向け、行政と市民、市内外の人々が交流し、新たなまちの価値を生み出していくプロジェクト。アートやデザインの視点を取り入れた拠点づくりやプログラムを通じて、国立市や多摩地域にある潜在的な社会課題にアプローチする。

2024年度の活動

活動拠点「さえき洋品●(てん)」のそばにある谷保駅南口緑地の使い方を市民とともに考える「GREEN GREETINGS」を開始。ガーデナーと植栽の手入れをしながら緑地の活用について話し合い、参加者同士が交流を行っている。また、お金を介さず地域とつながる企画を一般公募する「ただの店」を実施。出店メンバー7組が企画を持ち寄り、レコードなどを持ち寄って音楽を再生して語り合う会や、洋裁の相談会など、新たななかかわりが生まれはじめている。

10月には店舗やギャラリー、カフェなどをめぐり、作品や作家と出会う「Kunitachi Art Center 2024」を16日間にわたり開催。国立市内だけでなく、国分寺市からの後援、立川市と多摩信用金庫からの協力を受けた。会期中は、計18か所の会場をめぐるスタンブラリーを楽しむ姿も数多く見られた。

そのほか、公式メールニュース、フリーペーパー「OZINE (エンジン)」の刊行など、定期的な情報発信を行っている。

共催 一般社団法人ACKT、国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団
場所 国立市ほか
URL <https://www.ackt.jp>

▶ 多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting



多摩の暮らしを見つめ直すきっかけづくり

多摩地域の文化的、歴史的特性を踏まえ、その「地勢」を探ることを通じて、一人ひとりが自らの暮らしを新たな視点で見つめ直すプロジェクト。NPOが核となって、ケアや教育などに関するさまざまなプログラムを地域で展開している。それらを通じて、今日的な社会課題に向き合うためのコミュニティやネットワークの基盤づくりを目指している。

2024年度の活動

小学校を地域にひらく試みとして、奥多摩町立氷川小学校では総合学習の授業において、造形作家・下中菜穂とともに獅子舞などの文化や自然を調べ、子どもたちが地域の歴史や慣習についての理解を深め、発表するプログラムに取り組んだ。また、昭島市立光華小学校では、アーティスト・弓指寛治が約1か月半滞在し、地域のリサーチや子どもたちとのなかかわりから作品づくりを行った。こうしたこれまでの取り組みをもとに、関係者等へのインタビューを行い、「地域と学校の未来を考える」をテーマにした冊子シリーズ「つくることを考えてみよう」の『表現のひろがり可能性をめぐる』と『地域を生きる』を作成し、多摩地域の教育機関への配布も行った。

そのほか、昨年度から続く「演劇を通して“ケア”を考える連続ワークショップ」の継続企画として、アートのもつ創造性や身体性からケアする・されることへの根源的な問いについて探求する「物語をめぐりながら“ケア”と“私”について考える連続ワークショップ(全8回)+対話の場(全5回)」を実施した。

共催 特定非営利活動法人アートフル・アクション
場所 多摩地域
URL <https://cleavingartmeeting.com>

▶ カロクリサイクル



カロク(禍録)をめぐる表現とネットワーク

各地に蓄積されてきた「過去の災害の記録=禍録(カロク)」を読み込み、現在に応用するためのプロジェクト。災害の歴史をたどり、地域の歴史を掘り起こし、それらに向き合う人々と出会い、話し合い、ワークショップや展示を通じて表現を行う場をつくることから、災害期をともに生きるためのネットワークづくりを目指している。

2024年度の活動

江東区・大島四丁目団地内の拠点「Studio O4」は、開室から2年を迎えた。開室日には、企画目当ての人だけでなく、近隣のこどもたちや外国籍の住民なども、本棚にある本を読んだり、おしゃべりをしたりするなど、さまざまな過ごし方をしている。

展覧会「現代・江東ごみ百鬼夜行」では、区の歴史やごみに関する資料、新たに制作した物語などを展示。家庭のごみを持ち寄り「おぼけ」をつくるワークショップは好評を博し、会場にはこどもたちが制作した「ごみおぼけ」が増えていった。区のLINEや情報番組などで地域の話題として取り上げられた。

また、ワークショップ「記録から表現をつくる2024」では、参加者が関心のあるテーマを掘り下げ、年度末の展覧会では過去2年間の参加者を含めた有志が、その成果を発表した。Studio O4でのトークイベント、てつつかカフェ、読書会などは毎回定員に達し、東京から能登を応援する「のと部」の拠点となるなど、対外的にも認知されるようになった。

共催 一般社団法人NOOK
場所 江東区ほか
URL <http://nook.or.jp/karoku/wp>

▶ KINOミーティング



異なる「ルーツ」と出会い、協働の場をつくる

海外に(も)ルーツをもつ人々とともに、都内のさまざまなエリアで映像制作を中心としたワークショップを行うプロジェクト。背景の異なる人々との出会いや対話を軸とした映像制作を通して、新たなコミュニケーション、協働関係のあり方を発見する場をつくり出す。また、参加者が主体的にかかわれるプログラムの研究・開発も目指している。

2024年度の活動

今年度は過去の参加者を対象とした映画制作を通年で実施。一般参加のメンバー15名とともに、3つの季節を舞台にしたオムニバス映画『オフライン・アワーズ』を制作するワークショップを行った。現場ではさまざまな価値観や文化背景をもつ参加者が、それぞれの体験をもとにした脚本の執筆をはじめ、演出、美術、技術、俳優といった役割を交互に担いながら進行。言語や制作意識の違いによるコミュニケーションの課題にぶつかりながらも、表現の可能性と向き合い、対話による他者との協働のあり方を模索した。

3月には東京都写真美術館にて試写会を開催。映画と制作のプロセスを取めた「メイキング映像」を上映し、参加者によるトークイベントも実施した。

そのほか、「だれもが文化でつながる国際会議 2024」では、カンファレンスゲストとして招かれ、プロジェクトの変遷やこれまでの活動のなかで開発された手法、過去に制作した映画作品などを紹介した。

共催 一般社団法人パンタナル
場所 都内各所
URL <https://www.kino-meeting.com>

▶ めとてラボ



(撮影 | 中谷美帆)

誰もが「わたし」を起点にできる共創の場を

視覚言語（日本の手話）で話そうろう者・難聴者・CODA（ろう者の親をもつ聴者）が主体となり、異なる身体性や感覚世界をもつ人々とともに、自らの感覚や言語を起点にコミュニケーションを創発する場をつくるプロジェクト。手話を通じて育まれてきた文化を見つめ直し、それらを巡る視点や言葉を辿りながら、多様な背景をもつ人々が、それぞれの文化の異なりを認め合うためのコミュニケーションやその仕組みを研究・開発している。

2024年度の活動

活動拠点「5005」を、よりひらかれた場として活用するため、「5005開放日」を開始した。毎月3日間ほど誰もが来られる日を設定し、ワークショップや勉強会なども同時に行った。

「デフスペースリサーチ」では、ろう者の生活空間である「家」に着目し、空間を見渡せる吹き抜けの構造や、工夫された照明の配置など、「見る」ことを中心にデザインされたデフスペースの特徴を捉えた写真・映像の制作に取り組んだ。展覧会「DeafSpace Design ろう者の身体×家」では、写真や映像の展示、トークなどを通して、これまでのリサーチの成果を紹介した。

視覚言語である手話の記憶・記録のアーカイブの一環として、ろう者の家庭で撮影されたホームビデオを鑑賞しながら対話を行う「ホームビデオ鑑賞会」は、一般からもホームビデオを募集するなど、プログラムの運営やかかわりをひらく取り組みをはじめた。また、こどもの遊ぶ様子を映像で記録し、遊びが生まれる背景を研究する「アンビバ」プロジェクトがはじまった。

共催 一般社団法人ooo

場所 台東区ほか

URL <https://metotelab.com>

▶ Memorial Rebirth 千住 2024



(撮影 | 富田了平)

地域とつながり、市民とつくるパフォーマンス

「Memorial Rebirth 千住」（通称：メモリバ）は、無数のシャボン玉で見慣れたまちを光の風景へと変貌させる、現代美術作家・大巻伸嗣によるアートパフォーマンス。まちなかアートプロジェクト『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』（通称：音まち）の一環として2011年にはじまる。市民とアーティストが協働し、足立区内の商店街や小中学校、魚市場など「地域をつなぐパト」のように開催地を広げ、さまざまな記憶と人をつないでいる。

2024年度の活動

メモリバは、2011～21年度まで共催事業を行っていた音まちの目玉プログラム。2020年にコロナ禍により中止となった大規模開催に向けて調整を続け、念願の都立舎人公園での開催にこぎつけた。舎人公園駅を管轄する東京都交通局とのコラボキャンペーンも実施し、オリジナルの記念品抽選企画や、都営地下鉄全駅及び日暮里・舎人ライナー各駅でのポスター掲出、チカッ都ビジョンでのPR映像放映なども行った。また、12月1日の本番に向けて、市民スタッフ主導の小さなメモリバ「ふわり◎シャボン玉」や、衣装づくりや踊り手・歌い手として参加するためのワークショップ「メモリバ学校」などを実施し、地域の機運を高めていった。

当日は、数多くのバリエーション豊かな屋台が出店。昼の部ではオリジナルの盆踊り「しゃぼんおどり」を来場者と輪になって踊り、夜の部ではゲストアーティストのコラボレーションによって、暗間に一夜限りの幻想的な光と音、そして身体の揺らぐ圧倒的な空間を立ち上げた。

共催 特定非営利活動法人音まち計画、東京芸術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、足立区

場所 足立区

URL <https://aaa-senju.com/ohmaki>

▶ Tokyo Art Research Lab (TARL)



(撮影 | 齋藤彰英)

次の時代を見据えたインキュベーションの場

アートプロジェクトを実践する人々にひらかれ、ともに作り上げる学びのプログラム。現場の課題に応じたプログラムやコンテンツの開発、ゲストや講師とともにワークを行うゼミや講座、プラットフォームとしてのウェブサイト運営などを通じて、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指している。

2024年度の活動

芹沢高志（P3 art and environment 統括ディレクター）がナビゲーターを務める「新たな航路を切り開く」では、アートプロジェクトを構想し、実践していく力をつけるためのゼミを開催。また、出演者の活動を中心に、TARLウェブサイトに蓄積された資料やひとびとのデータベースを紐付け、2011年以降の社会とアートプロジェクトの関係を見出すためのオンライン年表を制作・公開した。

研究開発プログラムでは、日々見過ごしてしまっている都市生活の「環境」を見つめ直し、自身との関係を再び見出す手法としての展示企画や、ウェブアクセシビリティのあり方について捉え直すために、これまでの取り組みを振り返り、レポートにするプログラムを実施。また、令和6年能登半島地震において、市民の手で記録を残す「コミュニティ・アーカイブ」の手法を考えるプログラムをせんだいメディアテークとともに実施した。

そのほかTARLウェブサイトでは、デザインのリニューアルやコンテンツの拡充に取り組んだ。

場所 都内各所

URL <https://tarl.jp>

▶ Artpoint Meeting



(撮影 | 高岡 弘)

社会とアートの関係性を探るトークイベント

「まち」をフィールドに、人々の営みに寄り添い、アートを介して問いを提示するアートプロジェクトを紐解き、最新のテーマを追求するトークイベント。アートプロジェクトに関心を寄せる人々が集い、社会とアートの関係性を探り、新たな「ことば」を紡ぐ。

2024年度の活動

第15回は「プロジェクトを広げる、“かかわりしろ”のつくりかた」をテーマに、港区文化芸術ネットワーク会議と連携し、実施。ゲストに水戸芸術館現代美術センター・教育プログラムコーディネーターの中川佳洋と、京都にあるバザールカフェのスタッフ・狭間明日実と松浦千恵を迎えた。水戸芸術館の「高校生ウィーク」と、さまざまな人々が社会のなかでともに生きることのできる場を目指す「バザールカフェ」を事例に、活動に関心をもつ人々が自分なりのやり方でかかわり、活動を続けていくために必要な「かかわりしろ」づくりについて議論した。

第16回は「オンラインをつかう、“伝えかた”と“残しかた”」をテーマに、初めてオンラインのライブ配信で実施。ウェブディレクターの萩原俊矢がモデレーターを務め、アートマネージャーの筋貴彦と、アーキビストの明貴紘子をゲストに迎えた。コミュニケーションやアーカイブの可能性を広げる、オンラインによる活動の工夫や広げ方について議論した。

場所 港区、オンライン

URL <https://tarl.jp/projects/apm2024>

東京都・区市町村連携事業



(撮影 | Mino Inoue)

自治体の課題に応じた、新たな文化事業を試みる

東京都内の区市町村と連携し、地域のニーズや自治体の政策課題に応じた文化事業を立案。NPOや文化財団等さまざまな文化の担い手と連携し、まちなかや文化施設等で文化事業を行うことで、より多くの人々が地域のなかで芸術文化に触れる機会をつくる。

2024年度の活動

都内の区市町村の担当者に、各自治体の課題などについてアンケートをとり、要望のあった自治体へのヒアリングを実施。それぞれの抱える政策課題を聞き、課題に応じた事業の対象や手法を絞り込み、区市町村の担当者を中心に専門性のあるパートナーと協働して事業に取り組んだ。

西東京市と中野区では自治体のホールや庁舎を舞台に、東京文化会館の手法を活用した音楽ワークショップやコンサートを開催。西東京市は参加対象を「子ども」に絞り、中野区では障害の有無にかかわらず参加できるプログラムづくりを行った。

府中市では、2023年度まで共催していた『Artist Collective Fuchu [ACF]』から生まれたラジオ企画『おとのふね』の枠組みを活用し、シリーズ「共生社会を聞いて、みる」を実施。2025年のデフリンピックの会場になる府中市で、共生社会にまつわるゲストを招き、配信動画のアクセシビリティを高めるなど、実践的な取り組みを行った。

また、国分寺市とは今後の連携を模索するためのディスカッションやまち歩きなどを行った。事業の実施を通じて、区市町村の担当者が文化事業の立案や運営プロセスを把握し、新たな事業の「前例」をつくることで、自治体を主体とした継続的な文化事業につなげる。

場所 西東京市、中野区、府中市

お知らせ Information

Mail News



毎月1回、メールニュースをお届けしています!

アートプロジェクトの現場の最新のイベント情報やレポートなどを「Artpoint Letter」としてお届けしています。希望される方は、こちらからご登録ください。



Website



アートプロジェクトの担い手のためのプラットフォームとして、さまざまな資料を公開しています。

Tokyo Art Research Lab (TARL) のウェブサイトでは、東京アートポイント計画やTARLで制作した冊子のPDFなどを330点以上公開しているほか、研究・開発プロジェクトのレポート、アートプロジェクトに関する年表など、さまざまなコンテンツを掲載しています。企画や運営、研究の参考にぜひご活用ください。

<https://tarl.jp>



YouTube



アートプロジェクトに関する講座やプロジェクトの記録映像を公開しています。

Tokyo Art Research LabのYouTubeチャンネルでは、アートプロジェクトの運営や実践を学ぶ講座、手話やろう文化を学ぶ映像のほか、ウェブサイトの制作プロセスを考える座談会、都内各地の拠点を訪ねたインタビューなど、120本以上のコンテンツを公開しています。

<https://www.youtube.com/@tarl302>



Artpoint Reports

2024 → 2025

編集 | 川村庸子

執筆 | 佐藤恵美、杉原環樹、梶谷勇介

アートディレクション&デザイン | 北岡誠吾

印刷 | 株式会社歩プロセス

プログラムオフィサー | 佐藤李青・小山冴子・川満ニキアン (アーツカウンシル東京)

監修 | 森 司 (アーツカウンシル東京)

発行 | 2025年3月25日 第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス5階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

ISBN978-4-909894-57-1 C0070

営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます。

